裏切りのエシックス

—太宰治「駈込み訴へ」論—

Ethics of betrayal in the text of “Kakekomiuttae” written by Osamu Dazai

高橋宏宣
福島工業高等専門学校一般教科
Hironobu Takahashi
Fukushima National College of Technology , Department of General Education

（2013年9月17日受理）

Why did Judas in “Kakekomiuttae” written by Osamu Dazai betray Jesus? This article analyzed the process of narrowness of Judas’ mind that had no choice without betrayal although he had been a devout believer in Jesus.

Judas had a high intellectual faculty, a good head of business and a management skill of daily life. So he was very proud. And he believed he could understand what nobady else could understand. But that offended the teachings of Jesus. Jesus taught Judas how imperfect he was. But Judas didn’t accept that. As a result, Judas betrayed Jesus.

Key words: Osamu Dazai, Kakekomiuttae, betrayal, ethics

1　はじめに

本論は、太宰治の「駈込み訴へ」（『中央公論』昭和一五・二）を読み解き、ユダが「あの人」（イエス）を裏切って、「旦那さま」に売るにいたった理由を考察したものである。こうした問題設定は、「駈込み訴へ」の批評史や研究史の中で繰り返し提示され、それに対する回答も、ユダの語りと内容の両面から、探究され続けてきた。本論は先行研究の論点を整理してその成果を踏まえながら、ユダの語りで〝語り落とされているもの〟に着目し、裏切りの理由を再検討してみたいと思う。

発表当初、「駈込み訴へ」は「新味」がなく「成功してゐない[1]」作品と評され、また「基督を売つたユダの心理が余りにもまつとう[2]」であるとして、独創性の乏しさが難じられた。反対に、人間の精神が両極に振れる様態を見事に描いた作品とも評価された[3]。こうした両極端な評価が両立し得た背景には、昭和九年刊行のシェストフ『悲劇の哲学』（阿部六郎・河上徹太郎訳、昭和九・一、芝書房）の存在がある。同書の影響の下にユダが文学的に主題化される条件は既に揃っていたのであり[4]、「有名な逸話を下地としてイエスとユダの関係が生身の人間同士の物語に変換される素地は、時代的に十分準備されていた[5]」のであった。『新約聖書』の単なる現代版翻案が、発表時において陳腐なものであったことを考えると、「駈込み訴へ」もまた、新たに解釈されたユダを文学的に表象していこうとする機運に沿う形で構想されたものと思われる。

先行論の数は多いが、大別すると、太宰治の創作意図に関するもの、ユダの裏切りを内在批評的に読解するもの、作品の生成過程に関するもの、以上の三つに分けることができる。

太宰の創作意図を探った論としては、太宰の左翼運動からの離脱体験の反映をユダに見る論[6]、左翼運動のみならず昭和五年から十一年にかけての太宰の実生活における苦悩の投影をユダに認める論[7]がある[8]。内在批評的読解では、初期には、ユダがイエスを「神の子」と見たのか、それとも「人の子」と見たかという点に着目した論[9]が発表され、その後、イエスとユダの対立を、内容、語りの両面から分析するようになった。渡部芳紀は、イエスとユダを「理想主義者」と「現実主義者」の対立としたが[10]、山田晃はユダを「愛の理想家」と見立てて、イエスとユダが単純な二項的対立になっていないことを示した[11]。「駈込み訴へ」がユダの一人称の語りによって成立し、その中のイエスがあくまでユダの目を介して形象化されたものである以上、ユダとイエスの間に「対立」を前提してしまうと、作品の読解にある種の歪みを内包してしまうことになるだろう。

作品の生成過程に関する先行論では、「駈込み訴へ」が先行する文献をどのように取り込んで成立したかについて、詳細な検討を重ねてきた。『新訳聖書』に関しても、四つの福音書の中の一つだけが参照されたのではなく、複数の福音書の記述が踏まえられていることが明らかにされ、更に塚本虎二主宰の『聖書知識』の影響、及び昭和九年から始まった山岸外史との交友と、山岸の「人間キリスト記」（『コギト』昭和一二・一二～昭和一三・六。単行本『人間キリスト記』は昭和一三年一一月に第一書房より刊行）の影響が指摘されている。高橋清隆は、『新約聖書』の四福音書（「マタイ」・「マルコ」・「ルカ」・「ヨハネ」による福音書）及び『聖書知識』と、「駈込み訴へ」の本文を詳細に比較し、「駈込み訴へ」がこれらの先行する文献からどのように行文されていったかを明らかにした[12]。高橋論から教えられるのは、「駈込み訴へ」の冒頭部分（「あの人」との春の浜辺での散歩より前の部分）と結末部分（小鳥の声の挿話以降）が、『新約聖書』の四福音書にも、『聖書知識』にもないことである。木村小夜は「駈込み訴へ」の成立に山岸外史の「人間キリスト記」の影響を指摘したが[13]、山岸の「人間キリスト記」にも、先に指摘した「駈込み訴へ」の冒頭部分と結末部分にあたる記述はない。

このことから、「駈込み訴へ」冒頭部分、すなわち、「あの人」と自分との関係を簡潔に述べ、他の弟子たちを愚弄しつつ「あの人」の意地悪を告発する部分と、結末部分、すなわち、夜にさえずる小鳥の声に語りを妨げられ、「旦那さま」から銀三十を受け取る部分、以上の二箇所が太宰の創造したユダということになる。この部分のユダの語りの中に、『新訳聖書』のユダとも山岸外史のユダとも異なる、イエスを裏切らねばならなかった理由が、揺曳しているものと思われる。

ユダは「駈込み訴へ」の冒頭で次のように訴えている。

あの人は、私の師です。主です。けれども私と同じ年です。三十四であります。私は、あの人よりたつた二月おそく生れただけなのです。たいした違ひが無い筈だ。人と人との間に、そんなにひどい差別は無い筈だ。それなのに私はけふ迄あの人に、どれほど意地悪くこき使はれて来たことか。（傍線・引用者、以下同）

私は今まであの人を、どんなにこつそり庇つてあげたか。誰も、こゝ存じ無いのです。あの人こそ自身だつて、それに気がついてゐないのだ、いや、あの人は知つてゐるのだ。ちやんと知つてゐます。知つてゐるからこそ、尚更あの人は私を意地悪く軽蔑するのだ。

あの人は美しい人なのだ。私は、もともと貧しい商人ではありますが、それでも精神家といふものを理解してゐると思つてゐます。だから、あの人が、私の辛苦して貯めて置いた粒粒の小金を、どんなに馬鹿らしくむだ使ひしても、私は、なんとも思ひません。思ひませんけれども、それならば、たまには私にも、優しい言葉の一つ位はかけてくれてもよさそうなのに、あの人は、いつでも私に意地悪くしむけるのです。

「私」は数々の苦労を重ねて「あの人」を庇い、世話し続けてきた。そのことを「あの人」はよく知っているにもかかわらず、「私」を「嘲弄」すると訴えるユダの口上には、「意地悪く」という言葉が三回出てくる。後に、ユダは「あの人」への捨てきれぬ愛を告白することになるが、こうした経過から読み取れるのは、自らの「無報酬の、純粋の愛情」や奉仕を「あの人」が受け取らないことに対するユダの戸惑いである。なぜ「あの人」は、自分の「無報酬の、純粋の愛情」を受け入れないのかユダには理解できない[14]。その苛立ちが「あの人」を非難する「意地悪く」という言葉に繋がっていると考えられる。

一度は深く帰依しながら、裏切るよりほかに選択の余地がなくなってしまったユダの精神の狭隘化の過程は、理解できないものを扱いきれなくなった果てに起こるべくして起きたというのが、本論の結論である。以後、この結論にいたるまでの道筋を、ユダの語りに着目して解き明かしていきたい。

2　ユダの語り

『新約聖書』の四福音書の三人称の語りは、全知の視点から、事後的に、ユダの裏切りによるイエスの死を記述している。そこには、出来事の相違はあれ、イエスの善とユダの悪という絶対の枠組がある。一方、「駈込み訴へ」はユダの一人称の語りを採用することによって、「あの人」の内面や意図を客観的に記述する枠組を外している。これにより、「あの人」の内面や意図は、ユダの充填すべき空所となっている。「あの人」は多くを語らず、それゆえ弟子たちはその意図を忖度し、しばしばはかりかねる。ユダを除く弟子たちは、「あの人」の言動の意外性に素直に驚くだけだが、ユダだけは「あの人」の内面を巧みに構成し、常に「あの人」を理解可能な対象として捕捉し続けていく。

ユダの語りは、「旦那さま」に「あの人」を売り渡す渦中にある。そこでは、語り手であるユダも、聞き手である「旦那様」も、次に何が語られ、その語りがどのような状況を新たに生み出していくのか予測がつかない。しかも、語り終わった後に「あの人」が拘束されることは疑いない。自らの語りが「あの人」の命運を決定的に左右するものである以上、ユダは常に興奮と緊張の錯綜した状態におかれている。

この作品には二箇所しか改行がない。その改行も、大幅な内容の変更を指示するものではないので、ユダは全編にわたって淀みなく語ったと考えるのが妥当である[15]。ユダの語った内容は、大きく分けて六つの部分に分けることができる。具体的には、①駆け込んで「あの人」の非を述べ立てる冒頭部分、②春の海辺での「あの人」との語らい、③ベタニアのシモンの家での出来事、④エルサレムの宮殿での出来事、

⑤過越の祭の夜の宴会、⑥「旦那さま」から金銭を受け取る結末部分、の各部である。ユダは、興奮と緊張によって昂ぶる精神を統御しつつ、「あの人」を訴え出るに至るまでの二人の関係を述べ、「あの人」が売られねばならぬ理由を、「意地悪」な性格と「寂しさ」ゆえの自滅願望とに整理して訴え出ることのできる男なのである。山田晃はユダを「文藻において抜きんでたインテリ[16]」と述べたが、文学的な才能を含めた知的能力全般にわたり、ユダが卓越した能力の持ち主であることを、はじめに確認しておきたい。

3　鏡像としての「あの人」

そうしたユダの「あの人」への帰依の仕方は、他の弟子たちと全く異なっている。ペテロ、シモン、ヤコブ、ヨハネには、「一生を安楽に暮せるやうな土地が、どこにも無い」のであり、彼らの帰依は「現実の生活を奪われ、あるいはそこから追われた者たちが、現実の生活に代わるものを彼岸に求める[17]」という現実的な動機に根差していた。ユダ以外の弟子たちにとって、「あの人」は「神の御子」なのであり、絶対の安息の地である「天国」へ導いてくれる至高の媒介者である。

一方、ユダにとって「あの人」はまず「美しい人」であった。ユダは「あんな美しい人はこの世に無い。私はあの人の美しさを、純粋に愛してゐる」と言っている。では、あの人が「美しい人」であることは、ユダにとってどういう事態を指しているのだろうか。

ユダが「あの人」と春の浜辺を二人きりで散歩する場面がある。

「おまへにも、お世話になるね。おまへの寂しさは、わかつてゐる。けれども、そんなにいつも不機嫌な顔をしてゐては、いけない。寂しいときに、寂しさうな面容をするのは、それは偽善者のすることなのだ。寂しさを人にわかつて貰はうとして、ことさらに顔色を変へて見せてゐるだけなのだ。まことに神を信じてゐるならば、おまへは、寂しい時でも素知らぬ振りして顔を綺麗に洗い、頭に膏を塗り、微笑んでゐなさるがよい。わからないかね。寂しさを、人にわかつて貰はなくても、どこか眼に見えないところにゐるお前の誠の父だけが、わかつてゐて下さつたなら、それでよいではないか。さうではないかね。寂しさは、誰にだつて在るのだよ。」さうおつしやつてくれて、私はそれを聞いてなぜだか声出して泣きたくなり、いいえ、私は天の父にわかつて戴かなくても、また世間の者に知られなくても、ただ、あなたお一人さへ、おわかりになつてゐて下さつたら、それでもう、よいのです。私はあなたを愛してゐます。ほかの弟子たちが、どんなに深くあなたを愛してゐたつて、それとは較べものにならないほどに愛してゐます。

「あの人」は、「不機嫌な顔」をして他者に「寂しさ」を読み取らせるユダの作為を戒め、それを「偽善」だとし、天上の絶対者である「神」の承認を受け入れるよう教え諭している。しかし、ユダの気持ちは「神」へとは向かわず、「あの人」による承認だけを求めることになる。ユダが抱いたのは理由のわからない深い感動であって、崇高な教えによって説得された喜びではない。

「おまへの寂しさは、わかつてゐる」と言われたユダは、「なぜだか声出して泣きたくな」ったと言っている。高橋清隆は「ユダは寂しさにさいなまれている[18]」と指摘し、高橋論を受けて西原千博は、引用部でのユダの感動が、「あの人」に自身の「寂しさ」が理解されたことにより生じたと述べている[19]。これは重要な指摘である。ユダは「ずいぶん広い桃畠」を持つ裕福な家に生まれ、両親も健在で、「立派な青年」との誇りと「趣味家」としての自負を持ち、何一つ不自由のない半生を送ってきた。しかし、何らかの満たされなさや欠如を抱えており、それを自分で埋め合わせることができずにいた。それを「おまへの寂しさは、わかつてゐる」と現世でただ一人見抜いたのが「あの人」であり、そのことへの深い感動がこの場面での「あの人」への「愛」として語られているのだと考えられる。

それにしても、何事も饒舌に語り得るユダが、「あの人」の「美しさ」の中身について全く言及していないのは奇妙である。

けれども私は、あの人の美しさだけは信じてゐる。あんな美しい人はこの世に無い。私はあの人の美しさを、純粋に愛してゐる。それだけだ。

ユダは「美しさ」の内実に言及することなく、「純粋に愛してゐる」こと「だけ」を語る。言表不可能な「美しさ」を備えた「あの人」とは、言葉による分節化を超越した境位に現出する幻像＝理想像であり、その理想像との一体化がユダにとっては至福の境地と錯覚されている。ユダの最終的な願いは、「あの人」に導かれて「天国」へ至ることではない。ユダの絶対の安息とは、次のようなものである。

私には、いつでも一人でこつそり考へてゐることが在るんです。それはあなたが、へだらない弟子たち全部から離れて、また天の父の御教へとやらを説かれることもお止しになり、つつましい民のひとりとして、お母のマリヤ様と、私と、それだけで静かな一生を、永く暮して行くことであります。
[…]
私は、ただ、あの人から離れたくないのだ。ただ、あの人の傍にゐて、あの人の声を聞き、あの人の姿を眺めて居ればそれでよいのだ。さうして、出来ればあの人に説教などを止してもらひ、私とたつた二人きりで一生永く生きてゐてもらひたいのだ。ああ、さうなつたら！　私はどんなに仕合せだらう。

「あの人」と「私」、その二人を慈愛のまなざしで見つめる「お母のマリヤ様」。これが、ユダの思い描く幸福の極点としてのイメージである。そこで「あの人」は「天の父」との関係を解消し、「つつましい民のひとり」となって「私」と同じ地平に立つことが望まれる。これはまさしく、J・ラカンの提唱した幼児の鏡像段階における、鏡に映った自分の像を見て喜悦する主体と、それを見守る母の視線という構図である[20]。ユダは「あの人」を自己の鏡像として見出し、自己の同一性の根拠を、「あの人」の中に見出してしまったのである[21]。だから、同じ年齢であることや、「たいした違ひが無い」ことが繰り返し強調される。「あの人」への信従を決めた最初の出来事についてユダは語っておらず、なぜ恵まれた境遇を捨てて「あの人」に信従したのかは不明である。しかし、信従の初発の動機がなんであったにせよ、ユダの語っている現在、「あの人」がユダを現世に括り付けている幻像であることは確かである。

ユダは現世への執着を語り、「あの人」の教えに導かれて「天国」へ至ることを拒否する。その理由は、「天国」に行ってしまえば、「あの人」を現世において独占することができなくなってしまうからである。鏡像的双数関係にある二人が、他人には窺い知れない「寂しさ」を共に抱え、苦行の果てに二人だけの「静かな一生」を手に入れるという幻想こそ、「あの人」への「無償の奉仕」、「無報酬」の「純粋の愛情」の源泉となっているのである。

しかし、ユダが「あの人」に自らの働きに対する「優しいことば」を求めれば求めるほど、理想像への同一化は原理的必然として、「自己の主人性を他者と争う闘争の過程[22]」になっていく。

私はあなたを愛してゐます。ほかの弟子たちが、どんなに深くあなたを愛してゐたつて、それとは較べものにならないほどに愛してゐます。誰より愛してゐます。ペテロやヤコブたちは、ただ、あなたに附いて歩いて、何かいいこともあるかと、そればかりを考へてゐるのです。けれども、私だけは知つてゐます。あなたに附いて歩いたつて、なんの得することもないといふことを知つてゐます。それでゐながら、私はあなたから離れることが出来ません。どうしたのでせう。あなたが此の世にゐなくなつたら、私もすぐに死にます。生きてゐることが出来ません。

「あの人」なしには生きられないという痛切な愛の告白からは、ある関係に捕らわれていることにおぼろげに気づきながら、それをどうしてよいのかわからないユダの戸惑いと不安が読み取れる。あの人を「美

しい人」として見出し、それとの同一化を至福の極致と認識してしまった以上、それ以前の状態に無傷で戻ることはできない。ユダが「あの人」に主人性を行使しようとすれば、「あの人」は「師は必ず弟子よりも優れたもの」と言明してユダの欲望を否定する。宗教的帰依を介して関係を結んだのに、宗教を介する限り、ユダの望みは決して満たされることはない。ユダはいずれ「自己の権利を侵略する自己と酷似した同類に対する激しい攻撃性と憎悪を内包[23]」せざるをえなくなり、「あの人」を攻撃する事態を避けることができなくなっていくのである。

4　鏡像関係の崩壊①―商才と帰依の矛盾―

生活能力のない「あの人」や他の弟子たちに代わって、ユダは「宿舎の世話から日常衣食の購求まで」を引き受け、「あの人」の「奇蹟」の演出もしていた。

> 五つのパンと魚が二つ在るきりの時でさく、目前の大群衆みなに食物を与くよ、などと無理難題を言ひつけなさつて、私は陰で実に苦しいやり繰りをして、どうやら、その命じられた食ひものを、まあ、買ひ調くることが出来るのです。

商人としてのユダが優秀であることは疑いない。しかし、そのことは「あの人」への帰依と矛盾する側面を持つ。

ユダは金銭を介して商売する。つまり、ユダは貨幣を媒介としてモノを交換する能力に長けていた。商売とは、まだ交換されていない特殊で限定的な価値しか持たないモノを、貨幣を仲立ちとして、誰にとっても有用で価値のある普遍的なモノへと変える営みである。そこにあるのは、貨幣による普遍化の作用である[24]。

一方、宗教的帰依とは、他の誰とも取り替えのきかない者を師として見出し、従うことである。ユダにとって「あの人」は、取り替えのきかない人であり、貨幣によって計量できない人のはずであった。

つまり、ユダは、モノを普遍化する能力に長けると同時に、「あの人」を自分だけの理想像として限定しておきたいという願望を持っていたわけである。ユダの商才＝貨幣による普遍化の能力は「才能」として肯定的に捉えられているため、この能力が「あの人」への帰依と矛盾するとは決して意識されない。だから、「あの人」のために商才を発揮して無理難題を解決すればするほど、ユダは貨幣による普遍化の能力の肯定と唯一の存在である「あの人」の代替の拒否のはざまで引き裂かれていくのである。ユダが「あの人」を裏切る下地は、帰依の初期において、既にユダと「あの人」の関係の中に組み込まれていたのである。

5　鏡像関係の崩壊②―ユダの知性の限界―

ユダが高い知的能力を持っていることは先に述べた。それに加え、ユダは生活能力のない「あの人」や他の弟子たちの世話まで一人で引き受ける現実処理能力をも持ち合わせている。そのユダにとって理解不能であったのは、「あの人」がなぜ自分に「意地悪」をするのかということであった。そこには「あの人」の何らかの意図が働いているはずなのであるが、それがユダにはわからない。

「あの人」の意図とはどのようなものなのか。次に引用するのは、「あの人」の言葉である。

> まことに神を信じてゐるならば、おまくは、寂しい時でも素知らぬ振りして顔を綺麗に洗ひ、頭に膏を塗り、微笑んでゐなさるが よい。わからないかね。寂しさを、人にわかつて貰はなくても、どこか眼に見えないところにゐるお前の誠の父だけが、わかつてゐて下さつたなら、それでよいではないか。

「あの人」は超越者としての「神」の位置について述べている。「神」は絶対者であり、すべてを知っている。だから、神に先んじて、神より多く、出来事の意味など知ることはできない。この真実を受け入れよ。そう「あの人」は説いている。それは換言すれば、卑小な存在としての自分を受け入れよということである。出来事の正しさは「神」が保証しているのであるから、未知の出来事に遭遇した時に取るべき態度は、出来事をありのままに受け入れること、わからないものはわからないままに受け入れることである。「あの人」はこの教えを、多くの場合態度を通じ、弟子たちの中に浸透させようとした。

ユダは、高い知的能力と現実処理能力とを備えた、誇り高い男である。それに加え、次のような特殊な才能さえあると言う。

私は、ひとの恥辱となるやうな感情を嗅ぎわけるのが、生れつき巧みな男であります。自分でもそれを下品な嗅覚だと思ひ、いやでありますが、ちらと一目見ただけで、人の弱点を、あやまたず見届けてしまふ鋭敏の才能を持つて居ります。

ユダは「恥辱」や「弱点」といった、人が露出を深く恐れて胸中深くに固く秘しているものすら看破できると豪語する。目に見えないものの存在すら一瞬で探りあてる自己の能力に対して、ユダは過剰なほどの自信を持つ。その「鋭敏の才能」は、「生まれつき」の天賦のすとして、自己陶酔と見紛うほどの自信とともに、全面的に肯定されている。

ユダは、本来理解不可能なものまで理解可能なものとして知的に処理せずにはいられない男なのである。わからないものをわからないまま受け入れ、そこに「神」の存在を認めよという「あの人」の教えが、ユダの自己の能力に対する過剰な自信といかに背馳するものであるかは明白である。自分にわからないことを措置できる高次の存在を認め、それに敬意を払うためには、わからないものを前にしたとき、自分の能力の限界を自覚できなければならない。ユダにはそれができなかった。

「あの人」が、そうしたユダの知的側面を見落とすはずがない。「あの人」がユダに課した修行とは、自己の知的能力の限界を自覚することなのであった。だから、「あの人」はユダを容易に結論の出せない状態においた。それがユダには「意地悪」と感じられたのである。現世には理解不能なものがあり、現世の秩序一般を超越的につかさどっている神が存在するということを、「あの人」は繰り返しユダに悟らせようとした。「あの人」が何より戒めるのは、「世の中は、そんなものぢや無いんだ」とか、「世の中、そんなに甘くいつてたまるものか」といったような、世上の秩序一切を知っているかのようにふるまう不遜な知的態度なのである。「あの人」がユダの「無報酬の、純粋の愛情」を、それと知りつつ受け取らないのは、受け取らないことによって、ユダの惑溺する閉じられた知性の全能感く裂け目を入れるためであった。

ユダの知的能力への自負が「あの人」の言動と拮抗している様子を、具体的な場面に即して検証してみることにしよう。ベタニアのシモンの家で、マリアが「あの人」の頭に香油をかける場面がある。マリアの行為は「異様」なもので、その場に居合わせた者たちには、マリアがなぜそのようなことをするのか理解不能である。ユダはマリアの非礼を咎め、その無駄を叱ったが、それはごく自然な反応であって、ユダの叱責に非があるとは思われない。しかし、「あの人」は次のように言って、ユダを含めた弟子たちをたしなめる。

「この女を叱つてはいけない。この女のひとは、大変いいことをしてくれたのだ。貧しい人にお金を施すのは、おまへたちには、これからあとあと、いくらでも出来ることではないか。私には、もう施しが出来なくなつてゐるのだ。そのわけは言ふまい。この女のひとだけは知つてゐる。この女が私のからだに香油を注いだのは、私の葬ひの備へをしてくれたのだ。おまへたちも覚えて置くがよい。全世界、どこの土地でも、私の短い一生を言ひ伝へられる処には、必ず、この女の今日の仕事も記念として語り伝へられるであらう。」

「女」は「あの人」の「死」を既に知っており、善行を施したのだと「あの人」は言うのだが、なぜそのようなことがわかるかについては、「そのわけは言えない」と言って、口を噤んでしまう。もちろん、ユダには「あの人」の言う「そのわけ」がわからない。だから、一旦ユダは「あの人の言葉を信じません」と言い、「大袈裟なお芝居」であると断ずる。

しかし、ユダはすぐに分析的知性を発動させ、「そのわけ」を自分の言葉で巧みに構成してしまう。ユダは「あの人」の「声」や「瞳の色」に「異様なもの」を感じ取ったと言い、「幽かに赤らんだ頬」と「うすく涙に潤んでゐる瞳」を根拠に「無智な百姓女」くの「恋」を推論し、「私の眼には狂ひが無い筈」と確信してしまう。

また、エルサレムに入宮した後、「あの人」が宮殿を破壊し、三日で再建すると言った時のユダの反応は次のようであった。

> 傍の人もみな驚いて、これはどうしたことですか、とあの人に訊ねると、あの人の息せき切つて答くるには、「おまくたち、この宮をこはしてしまく、私は三日の間に、また建て直してあげるから。」といふことだつたので、さすがの愚直の弟子たちも、あまりに無鉄砲なその言葉には、信じかねて、ぽかんとしてしまひました。けれども私は知つてゐました。所詮はあの人の、幼い強がりにちがひない。あの人の信仰とやらでもつて、万事ならざるは無しといふ気概のほどを、人々に見せたかつたのに違ひないのです。

他の弟子たちは「あまりに無鉄砲」な「あの人」の言葉に唖然とするだけであったが、ユダにだけはそれが「幼い強がり」のためとわかったのであり、「あの人」が自らの限界を知って自棄になっていると解釈する。そして、磔刑の運命にある「あの人」を売ることが自らの「義務」であり、「純粋な愛」の最終形であると自得する。

「あの人」の言動の本当の意図は、「あの人」以外にはわからないはずである。ユダ以外の弟子たちは、「あの人」の行為の不可解さに対して素直に反応する。過越の祭の日、料理屋の二階で「あの人」が弟子たちの足を洗い始めた場面では、ユダ以外の弟子たちは「その理由がわからず、度を失つて、うろうろするばかり」であった。だが、ユダにだけは「あの人」の「秘めた思ひがわかるやうな気持」がするのである。

> みんな食卓に着いて、いざお祭りの夕餐を始めようとしたとき、あの人は、つと立ち上り、黙つて上衣を脱いだので、私たちは一体なにをお始めなさるのだらうと不審に思つて見てゐるうちに、あの人は卓の上の水甕を手にとり、その水甕の水を、部屋の隅に在つた小さい盥く注ぎ入れ、それから純白の手巾をご自身の腰にまとひ、盥の水で弟子たちの足を順々に洗つて下さつたのであります。弟子たちは、その理由がわからず、度を失つて、うろうろするばかりでありましたけれど、私には何やら、あの人の秘めた思ひがわかるやうな気持でありました。あの人は、寂しいのだ。極度に気が弱つて、いまは、無智な頑迷の弟子たちにさく縋りつきたい気持になつてゐるのにちがひない。可哀想に。あの人は自分の逃れ難い運命を知つてゐたのだ。

「あの人」は「寂しい」のであり、「逃れがたい運命」を知って「極度に気が弱つて」いるのだとユダは解釈する。「寂しい」境遇の発見によって、ユダは「あの人」との鏡像的な関係を再確認し、「いつでも光るばかりに美しかつた」「あの人」の姿を追憶する。「あの人」に足を洗ってもらったユダは恍惚となり、「私はあのとき、天国を見たのかもしれない」とさえ述懐している。ユダに絶対の安息がもたらされる〝天国〟とは、同じ年齢、同じ境遇、同じ心情を持つ者同士が向き合う鏡像的関係のうちにのみ見出されるものだからである。

しかし、「あの人」はこの鏡像的関係をたちどころに破壊する。「あの人」は弟子たちに「師は必ず弟子より優れたもの」と言い、裏切り者の存在を予告し、ユダの口にパンを押しあて、裏切り者として告発するのである。

この時ユダは、「あの人」の告発に否定も異議申し立てもせず、ただ「旦那さま」のもとへ走っている。この場面は注意が必要だ。ユダは、他の弟子たちの前で公然と辱められたことに激昂して「旦那さま」のもとへ走ったと語っていて、その理屈自体は筋が通っている。しかし、いつもは「あの人」の言葉の真意や意図を推測し、その内面を構成していたユダが、この場面では「あの人」の言葉（「おまへの為すことを速やかに為せ」）の意図を忖度することなく、文字通りに実行し、「あの人」を解釈することも、その内面を構成することも放棄しているのである。

パンを口に押し当てて、裏切り者を他人の面前で名指すという「あの人」の行為は、確かに過激である。しかし、これまでの「あの人」の言動からすれば、必ずしもこの行為だけが突出しているわけではない。ベタニヤのシモン家での出来事、エルサレムの宮殿の破壊、弟子たちの足を洗う行為、そのいずれにも弟子たちに窺い知ることのできない「あの人」の意図があったのであり、それを問いただすことこそ、弟子たちが師から学ぶ方法なのであった。実際、裏切り者の存在を弟子の中に予言することなどどうして可能なのか、弟子たちの中に誰一人として理解できる者はいない。「あの人」がパンを口に押し当てる前に、ユダが予め「あの人」の真意を見抜いていたかのように語っているが、それはあくまで「旦那さま」に語っている現在から事後的かつ遡及的に構成した自らの内面である。事実その通りであったとしても、裏切ろうと思っていたことと、実際に裏切ることの間には、容易に踏み越えることのできない径庭がある。だから、パンを口に押し当てられた場でユダが為すべきことは、他の弟子たちと同様に、なぜ自分が裏切り者として名指されなければならないのか、その理由を問いただすことであった。だが、もはやユダにはそれができず、その知的能力は限界に達した。

鏡像的な双数関係を志向するユダを拒み、「天国の父」に対する関係や師弟関係のような階層性の中に自分とユダを位置づけようとする「あの人」の意図を、ユダの知的能力ではもはや分析できない。ユダの知性が失調していることは、パンを押し当てられた後に、「あの人」と自分との関係を、「水と油」のごとき「永遠に解け合ふことの無い宿命」と決定論的に処理したり、「あの人」の意図を「腹いせ」や「いじめ」や「意地悪」という実に陳腐な紋切り型でしか表現できなくなっていることからも明白である。

ユダの知的能力では、「あの人」が「私」に「意地悪」する理由へと絶対に進めない。なぜなら、ユダは自分が鏡像的関係にとらわれていることと、「あの人」が自分の知的能力の限界を意識させようとしていることに気づくことができないからである。知的能力の限界に達したユダはその状態に耐えられず、自己の権利を侵害してくる「あの人」を排除することなしに安息を得られないところにまで追い詰められ、「あの人」との関係を破壊する衝動に駆られて、「旦那さま」のもとへ訴え出たのである。

6　破産する自我

ユダにとって「あの人」が決定的に重要な人物で、簡単に絶縁できる人物でないことは、これまで述べた通りである。「あの人」の居所（ゲツセマネの園）を「旦那さま」に告げるに至るまで、ユダの口上には「あの人」を売ることへのためらいが滲出していた。

しかし、ユダは高い知的能力を持っているがゆえに、「あの人」と自分とのこれまでの出来事を整理して「旦那さま」に伝えることに成功し、「あの人」が売られなければならない運命にあったことを、説得的に語り得てしまった。祭司長や長老たちが「あの人を殺すことを決議した」ことを、町の物売りから聞いて知っているユダは、訴え出た今、「あの人」の死が確実であることを知っている。報われぬ奉仕への不満という、転倒した形での「あの人」への愛の確認で始まった訴えは、かけがえのない対象に死をもって報いる結果に終わりつつある。「あの人」との関係は修復不可能であり、ユダは自らが救済される余地まで売り払ってしまった。更に、唯一の存在であった「あの人」を「銀三十」の金銭と交換してしまった

ことで、ユダは「あの人」を計量可能な安っぽいものくと貶めてしまった。こうして「あの人」への「復讐」は、ユダが考えている以上に徹底的になされた。

それは、知的能力の高い自分が見出した美しい至高の対象が、結局は商売品と変わりのない計量可能で交換可能なものでしかなかったという、自己の知性の否定でもある。知的能力の誇りが自己存立の核であったユダにとり、この自己否定は自我の破産に等しい。自我を支える鏡像的対象の破壊と、自我の中核をなす自尊心の毀損を修復するすべを、ユダは持ち合わせていない。何事もなし得る自信のあったユダにとって、これは完全な敗北である。

物語の結末で、ユダの耳には小鳥の声がいつにも増して大きく響いてくる。

> ああ、小鳥が啼いて、うるさい。今夜はどうしてこんなに夜鳥の声が耳につくのでせう。私がこゝく駈け込む途中の森でも、小鳥がピイチク啼いて居りました。夜に囀る小鳥は、めずらしい。私は子供のやうな好奇心でもつて、その小鳥の正体を一目見たいと思ひました。立ちどまつて首をかしげ、樹々の梢をすかして見ました。

ユダの語りを中断するかのように挿入される「声」の「正体」を、ユダは決して見ることができない。なぜなら、それは抑圧していたものの回帰、すなわち、「あの人」を売ってはならないという抑圧された思いの噴出したものだからである[25]。この「声」は「つまらないこと」のはずなのに「耳について」仕方がないのだという。物語の本筋とは直接関係のない小鳥の声への言及は、語り終えることへの抵抗として挿入されたと見るべきだろう。語り終えることは「あの人」の死を意味し、それはユダの本意ではないからである。

「駈込み訴へ」ではユダの自裁について触れられていないが、「あの人」を売ったユダに残されているのは、自裁以外にないように思われる。

注

---

1 石坂洋次郎「文芸時評（4）」（『読売新聞』昭和一五・一・三一）
2 逸見広「文芸時評（二月創作評）」（『早稲田文学』昭和一五・三）
3 林房雄「新人の世界―文芸時評」（『文学界』昭和一五・三）。林は「駈込み訴へ」の主題が新しいものでないことを認めつつ、「魂の現実に動く姿を文学にとらへること」に成功した点を評価する。
4 詳細は、高橋英夫「ユダ的テーマの系譜」（『国文学』昭和五七・五）参照。
5 木村小夜「「駈込み訴へ」を読む―山岸外史「人間キリスト記」との接点から―」（『iichiko』108、平成二二・一〇）
6 亀井勝一郎「解説」（『太宰治全集第4巻』昭和三五・二、筑摩書房）
7 渡部芳紀「『駈込み訴へ』論」（『作品論太宰治』昭和五一・九、双文社出版）
8 この他、笠井秋生「「駈込み訴へ」試論」（『太宰治研究6』平成一一・六）は、太宰のコミュニズム運動への加担と離脱の苦悩がイエスとユダ双方に託されているとする。
9 玉置邦雄「「駈込み訴へ」の意義」（『日本文芸学』9、昭和四九・一〇）
10 注7に同じ。磯貝英夫「饒舌―両極思考「駈込み訴へ」を視座として」（『国文学』昭和五四・七）も同様の指摘をしている。
11 「論語・聖書・愛―「駈込み訴へ」雑記」（『一冊の講座太宰治』昭和五八・三、有精堂）
12 「太宰治「駈込み訴へ」と聖書」（『静岡近代文学』1、昭和六一・九）
13 注5に同じ。
14 森厚子「太宰治『駈込み訴へ』について―語りの構造に関する試論―」（『解釈』昭和五四・二）は、結末にいたるまでユダが「あの人」に対する自らの感情がなぜ生まれるのか、わかっていないと指摘している。
15 陸根和「『駈込み訴へ』論」（『実践国文学』47、平成七・三）は、「全体としてみれば、一息に語られたものであるという印象が強く、巨視的に見て言えば、これは改行なしの一続きの表現とすることができる」とする。
16 注11に同じ。

17 注11に同じ。
18 注12に同じ。
19 「『駈込み訴へ』試論」（『静岡近代文学』2、昭和六二・七）
20 「（わたし）の機能を形成するものとしての鏡像段階」（『エクリ』昭和四七・五、弘文堂）参照。なお、鏡像段階の理解については、福原泰平『現代思想の冒険者たち第13巻　ラカン―鏡像段階』（平成一〇・二、講談社）の解説に多くを負っている。
21 注5で木村氏は、「あの人」について考えることは、自分の規範となっている「あの人」との関係への欲望を示すことであると指摘している。
22 福原泰平『現代思想の冒険者たち第13巻　ラカン―鏡像段階』（平成一〇・二、講談社）、45頁。
23 前掲書73頁。
24 ジンメルによれば、モノは「貨幣と等号で結ばれる」ことにより「価値を切り下げられ」る。それゆえ貨幣は「最高のものをも最低のものの水準へと引き下げる」。つまり、「物のもっとも固有な価値は」「換金可能であるという事実によって傷つけられ」ることになる（ゲオルグ・ジンメル「近代文化における貨幣」、北川東子編訳『ジンメルコレクション』平成一一・一、ちくま学芸文庫）。
25 鳥居邦朗「「駈込み訴へ」精神家の死」（『太宰治論　作品からのアプローチ』昭和五七・九、雁書館）は、小鳥の声に「キリストを売ることは自分にとってかけがえのないものを失うことになるのだぞという、ユダを引きとめる声」を読み取っている。

※太宰治の作品は『太宰治全集4』（筑摩書房、平成一〇・七）を底本とし、旧字体は新字体に改めた。なお、本論は、平成二十四年十二月十五日に行われた平成二十四年度日本近代文学会東北支部冬季大会（仙台ビジネスホテル）における研究発表「裏切りのエシックス―太宰治「駈込み訴へ」論―」に基づき、成稿したものである。